



国語 A（主として知識）の正答率は69％であった。これは、県に比べて4％、全国に比べて5.8％低かった。特に、「話すことと聞くこと」（本校61.7％・県70.9％・全国69.2％）の正答率が低かった。なかでも、「共通点や相違点を考えて話し合う」問題の正答率が8～9％程低かった。しかし、「古文における言葉の響きやリズムを楽しむながら読む」問題は、75％の児童が正答し、県、全国に比べて4％程高かった。

国語 B（主として活用）は、正答率が51％であり、県（57％）や全国（57.5％）と比べて6％程低かった。しかし、「自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉える」読む能力を問う問題の正答率が、県、全国よりもそれぞれ3％、7％程高かった。しかし「話の構成や内容を工夫し、場に応じた適切な言葉遣いで自分の考えを話す」、「目的や意図に応じて、文章全体の構成を考える」書く能力や話す・聞く能力を問う問題はそれぞれ15％程も下回っていた。

国語では、A・B共通して「話す・聞く」能力、「書く」能力が低い結果になっている。日々の生活や授業で適切な言葉遣いで話す能力を高めるとともに、話の要旨や中心、話し手の意図を捉えながら聞き、質問したり、感想や意見を述べたりできる能力を高めていきたい。また、相手や目的、意図に応じ、調べたことや考えたことなどについて構成を整えたり、推敲したりして書くことができる能力を高めていきたい。

算数 A（主として知識）は、正答率73％であった。県とは4％、全国とは5.6％比べて低かった。「量と測定」、「図形」領域で5～7％差があった。特に、「正五角形は、五つの合同な二等辺三角形で構成できることを理解している」、「未知の数量を表す口を用いて、問題場面を除法の式に表すことができる」問題は10％程低かった。しかし、「1より小さい小数をかける乗法の問題場面を理解し、数量の関係を数直線に表すことができる」、「商を分数で表すことができる」問題はそれぞれ8％以上高かった。

算数 B（主として活用）では、特に「量と測定」領域が10％以上下回った。中でも「仮の平均を用いた考えを解釈し、示された数値を基準とした場合の平均の求め方を記述できる」問題が7～9％、「飛び離れた数値を除いた場合の平均を求める式を判断することができる」問題が12％以上と、平均を求める問題が低かった。

算数科では昨年度同様、同じ領域であっても、具体的なイメージがもてる問題の正答率は高かったので、今後も、色々な生活経験や算数的活動を通して、数量関係についての理解を深められる授業展開を充実させていきたい。また、特に大きく下回った平均の学習では、形式的に妥当な数値を求めるだけでなく、測定値の平均を求める意味を理解し、場面や状況に応じて数理的な処理の仕方をしっかりと吟味できる力が大切であるので育てていきたい。